

特集号のご案内：  
歯科領域における医療コミュニケーションの現状と展望

Introduction of Special Issue: Current Status and Prospects of Medical  
Communication in the Dental Field

木尾哲朗<sup>1)</sup>、野呂幾久子<sup>2)</sup>  
Tetsuro Konoo<sup>1)</sup>、Ikuko Noro<sup>2)</sup>

1)九州歯科大学総合診療学分野、2)東京慈恵会医科大学人間科学教室

日本医療コミュニケーション学会は、患者と医療者との対人レベルのコミュニケーションを実証研究する人文社会系研究者と医療系研究者の集いである「医療コミュニケーション研究会（2001年12月結成）」を母体とし、2022年4月に「ヘルスコミュニケーション学関連学会機構」の一分科会として発展的に改組されました。研究会時代から毎年2回の研究例会を開催し、これまでの開催回数は41回になります。

今回開催されたヘルスコミュニケーションウィーク2023～福島～における第2回学術集会では、「歯科領域における医療コミュニケーションの現状と展望」というテーマの下に、患者さんがご自身の患部をじっくりと見ることが難しいという特徴をもつ歯科領域のコミュニケーションについて臨床、研究、そして教育という視座からシンポジウムを開催しました。

シンポジウムの座長は、東京慈恵会医科大学の野呂幾久子先生と本稿を書いている木尾哲朗で、10月1日（日）の14:50～16:20の時間帯で実施され、3名のシンポジストに話題提供をしていただきました。

医療法人稲生会生涯医療クリニックさっぽろの高井理人先生からは、2021年に法制化された医療的ケア児に対する歯科的アプローチと小児在宅歯科医療についての発表を、九州女子大学栄養学科の濱寄朋子先生からは、医療訴訟と歯科臨床場面における医療コミュニケーションを阻害する因子に関する研究およびコミュニケーションと患者満足度の関連に関する研究成果の発表を、そして愛知学院大学短期大学部歯科衛生学科の鈴木一吉先生からは、歯科医学教育の視点から初診医療面接を超えるコミュニケーション教育という切り口から、話題提供をしていただきました。シンポジウム後半の質疑応答においてはフロアから、医療的ケア児への歯科的対応の課題について、歯学教育のOSCEにおける共感について、歯科や医科における Shared Decision Making について、歯科の疾病構造の変化について、かかりつけ歯科医や歯科衛生士のコミュニケーションについて等の質問があり、活発な意見交換がなされました。

シンポジストの方々には今回のシンポジウムの内容を執筆していただき、日本医療コミュニケーション学会誌第2巻としてここにまとめることができました。本雑誌に目を通して頂き、会員諸兄の研究のヒントになれば、今後の日本医療コミュニケーション学会の活動に資するものと期待しております。また、あわせて歯科医療のコミュニケーションと昨年度立ち上がった日本歯科コミュニケーション学会の活動についてご理解と認識を深めていただければ幸いです。